

令和2年度 第1回 静岡市立登呂博物館協議会会議録

- 1 日 時 令和2年10月30日（金）午前10時から午前12時まで
- 2 場 所 静岡市立登呂博物館 1階 登呂交流ホール
- 3 出席者 (協議会委員)
- 山岡 拓也 会長、海野 美枝 委員、北川 和彦 委員、
杉山 昌之 委員、弓削 幸恵 委員、木村 貴子 委員、
渋谷 かさね 委員、堀切 正人 委員、石亀 雅敏 委員、
上原 薫 委員 (全10名)
- (アドバイザー)
- するが企画観光局企画事業本部 伴野翔平 主任
(事務局)
- 岡村 渉 文化財課長
文化財課 (登呂博物館)
- 宮本担当課長兼登呂博物館長、梶山主査、鈴木主任主事、
國島主任主事、中村主任主事、佐野主事
- 4 傍聴者 0人
- 5 議事記録
- 1 文化財課長挨拶
 - 2 事務局職員紹介
 - 3 議事
 - (1) 令和2年度前半の事業報告及び令和3年度の方針
 - (2) 議題①「登呂遺跡を誇りに思う市民を育む登呂博物館運営の在り方」
 - (3) 議題②「登呂遺跡復元水田における観光者向け体験プログラム実施案について」 (現地視察含む)

事務局

本日はお忙しい中、貴重なお時間をいただきまして誠にありがとうございます。ただ今より令和2年度第1回静岡市立登呂博物館協議会を開会いたします。

始めに、本日の会議ですが委員定数10名のところ10名全員にご出席いただいておりますので、本会議は成立いたします。

また、本会議は市民の皆様にご公開することになっておりますが、傍聴希望の方はいらっしゃいません。

本日は私、中村が会の進行を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。それでは開会にあたりまして、文化財課長 岡村渉よりご挨拶を申し上げます。

1 文化財課長挨拶 課長

皆さん、こんにちは。文化財課長の岡村と申します。よろしくお願いいたします。委員の皆様には、ご多忙のところご出席いただきまして誠にありがとうございます。

さて、登呂博物館でございますが、新型コロナウイルス感染拡大に伴いまして、4月中旬から5月末まで休館させていただきました。今年度は、4月から9月までの総来館者数が前年比の37%という状況になっております。従いまして、本館の入館・観覧収入が減っておりますし、教育普及活動も失われております。そのような中で、6月以降の開館に際しましては来訪者の安心・安全を確保しながら、体験プログラムの開発や復元水田の一部を利用したドロん子パークを開催してまいりました。ドロん子パークでは、市内外また関東圏も含め約一か月に1千人ほど来ていただいております。

現在は、遺跡での体験を導入部分として、登呂遺跡や博物館の歴史的価値と魅力を発信することに力を入れております。また、遺跡を利用したユニークベニューも始めております。近隣の高等学校・中学校の吹奏楽部の生徒さんによる屋外演奏会を開催いたしましたし、マルシェの実施も計画しております。

アフターコロナという時代ですけれども、静岡市の歴史発信および観光拠点として、今後も登呂博物館が発展していくために、協議会委員の皆様からの活発なご意見を賜り、博物館事業に反映してまいりたいと思います。本日は忌憚のないご意見やご助言をいただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。これをもって私の挨拶とさせていただきます。

事務局

それでは、次第に沿って進めさせていただきます。まず、配布資料の確認をお願いします。「静岡市立登呂博物館協議会委員名簿」、「次第」、「登呂博物館パン

フレット」が2種類、「令和2年度 登呂博物館組織図」、「水とともに生きる - 静岡平野のパイオニア -」のカラー版チラシ、それから「登呂博物館館報 令和元年度印刷版」、「登呂エリアにおける歴史・文化資源の活用方策の検討状況」、以上になります。

続きまして、事務局から令和2年度事務局職員の紹介をさせていただきます。資料の組織図をご覧ください。

館長

館長の宮本です。本日はお忙しい中お集まりいただきありがとうございます。それでは本年度の転入職員をご紹介します。主任主事の中村匠吾です。

事務局（中村）

中村です。よろしくお願いいたします。

館長

次は主事の佐野佑奈です。

事務局（佐野）

佐野です。よろしくお願いいたします。

館長

今年度、皆さんとの連絡担当は中村となります。よろしくお願いいたします。なお、組織運営体制の変更に伴い、昨年までの役職であった非常勤嘱託及び臨時職員は、一括して会計年度任用職員となっております。

事務局

本日の協議会ですが、大きく二つの議題について、委員の皆様からご意見を賜りたいと思います。開催時間は2時間で例年と変わらないため、従来実施している前年度の事業実施報告、質疑応答については割愛させていただきます。先日送付いたしました資料をご覧ください、ご不明な点等ございましたら事務局まで個別にご連絡ください。

それでは、議題に入りたいと思います。議事の司会進行は博物館条例第12条第4項により会長に依頼したいと思います。山岡会長、よろしくお願いいたします。

山岡会長

おはようございます。静岡大学の山岡です。それでは、これより私の方で議事の司会進行をさせていただきます。よろしくお願ひします。議事の開始にあたり、本日の協議会は議事録について公開することになっています。公開にあたり、内容を会長や委員が確認し、署名することになっております。署名者として、私の他もう一人、今回は木村委員にお願いしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

木村委員

(了承)

山岡会長

それではよろしくお願ひいたします。

(1) 令和2年度前半の事業報告及び令和3年度の方針

山岡会長

では、令和2年度上期の事業報告及び令和3年度の事業方針について、事務局から説明をお願いいたします。

館長

それでは、令和2年度上期の事業報告及び令和3年度の事業案説明をいたします。限られた時間になりますので、少々急いで報告させていただきます。

まず、今年度は新型コロナウイルス感染症対策として、令和2年4月18日から5月31日まで臨時休館しました。また、再開後も1階の弥生体験展示施設での指導員が近くで実演するものや、屋外指導員の土器炊飯・火起こし体験を中止して、音声ガイドの貸出も停止しております。

では別紙2、令和2年度事業についてご覧ください。(1) 企画展「お米づくり、はじめました。－静岡市の弥生時代－」については、ちょうど先ほどの休館期間と重なっております。(2) 「実測」については、入館者が落ち込んでいる中で比較的多くの観覧者の来場となっております。(3) 企画展「水とともに生きる－静岡平野のパイオニア－」については、別添資料にチラシも付けております。2ページが一番上ですが、関連事業として「登呂歴史リレー講演会」という形で、4回連続のリレー講演会を行っております。(4) 企画展「「ちっちゃ」展」については、「ちっちゃいこと」に着目した内容で現在準備を行っております。(5) 企画展「王の誕生－静岡市の古墳時代－(仮題)」についても、現在準備を行っている段階です。

2 遺跡活用事業です。これについては例年どおり行っております。特にこの中

の(2)の一番下、「登呂遺跡復元水田活用・利活用事業」については、南側の水田の全面水田化に取り組んでおりまして、水田の面積を広げて、先ほど紹介いたしましたドロん子パークの解説も併せて行っております。

それでは、次に3ページです。中盤に教育普及事業とございます。この中を見ていただくと、中止になったものが幾つもございますが、これは3密対策として、指導する者がお客様と距離が取れないものや、口を介在するものについては中止させていただいております。共催連携としては、登呂まつりが中止になっておりまして、これはコロナが広まった5月の段階で開催中止を決定しております。

それでは、4ページに入ります。一番上の「登呂ミュージアムストリート2020」については、今年も継続して行っておりますけれども、NPO法人のキッズアートプロジェクトから補助金をいただいて実施しているもので、今年で2年目になります。

令和2年度の新規事業については、先ほど課長からも紹介がありましたが、田園コンサートとドロん子パークがマスコミの取材を受けて、広報の効果があつたものと考えております。

それでは、5ページに入ります。「静岡市立図書館新型コロナウイルス感染拡大防止対策一覧」とありますが、これは今年とった感染症対策一覧です。これについては、対象として文化庁の補助金がございますして、市議会の5月臨時会で補正予算を組みまして、総額205万余のうちの半額を国の補助をいただいて、機器の購入に充てています。

それでは、6ページ中盤、「新型コロナウイルス感染拡大に伴う来館者数の推移」です。来館者数が、4月中旬から5月まるまる休館ということで非常に減っております。8月末の段階で対前年8月末と比較して30%、9月で37%です。ちなみに今月は団体の来場者がたくさんみえており、だいたい例年並みぐらいまで復活しております。その下の「有料観覧者数比較」について、例えば7月が対前年比86%、8月が対前年比82%でございます。その上の来館者数と比較すると、例えば7月は来館者数が69%まで落ち込んでいますが、観覧者数でいうと86%。ですから観覧者数の実数は減っているのですが、7月・8月が対前年比で結構健闘しております。これは「実測」という企画展があつた時期になります。

一番下の考察ですが、来館者数も有料観覧者数も回復傾向にありまして、特に有料観覧者については一定のリピーターの確保ができております。10月から11月にかけて、山梨・長野からの団体の修学旅行生が来館する予定です。これは山梨・長野から東京方面の修学旅行が取り止めになって、代わりに旅行会社を通じて静岡のこういった所に大変申し込みがある状態で、今日もたくさんの団体の方がみえております。

以上で報告とさせていただきます。

山岡会長

ありがとうございました。それでは皆様から、ご質問・ご意見ございましたらお願いいたします。

特にないでしょうか。では本日は議題が二つあるので、先に進めさせていただきます。

(2) 議題①「登呂遺跡を誇りに思う市民を育む登呂博物館運営の在り方」

山岡会長

続きまして、前半の議題である「登呂遺跡を誇りに思う市民を育む登呂博物館運営の在り方」について、事務局から説明をお願いいたします。

館長

それでは、別紙3の資料をご覧ください。「静岡市立登呂博物館協議会の議題について①」とございます。

静岡市では、事務事業の改善に向けて、静岡市行財政改革推進審議会を設置しております。平成30年10月に、市長が歴史文化資源の活用及びその周辺地域との連携による地域活性化について諮問いたしまして、平成31年3月に次のような方針が出されています。これが「登呂エリア（登呂遺跡・登呂博物館・芹沢銈介美術館）」の目指す姿ということで、まず「稼げる施設」ということ。それと、「市民が誇りを持てる施設」の二点でございます。その目指す姿に近づくための三つの提言が、「市外からの誘客を図る」、「訪れた人が楽しむ」、「地域に対する愛着を育む」でございます。

そのうち、「市民が誇りを持てる施設（シビックプライドの醸成）」を実現するための施策について、以前からもこの協議会でご審議いただいているところで、資料2番目の「訪れた人が楽しむ」の提言の答申として、観光客が期待する日常から切り離された弥生時代の農村を感じる景観整備ということで、令和3年までに登呂遺跡内の全面水田化を目指して整備しております。ちょうどそれが、駐車場から博物館に来ていただく間にある水田です。今までは水田として利用されておらず、草原のようになっていたところの水田化を進めております。その全面水田化を、今年は南側水田の三分の一ぐらいを手掛けまして、一部でドロん子パークにするなど活用を始めています。

さらに、全面的に耕作を進めるにあたり、まず一番課題になっているのは人手です。そのために、若い力を活用した「田んぼサポーター」を集める取り組みを始めております。今年の博物館協議会に提出している「シビックプライドが醸成される」ということがまずテーマでございますので、田んぼのサポーターに高校生・大学生に来ていただいて、単に水田を耕すという労働力の提供だけではなく、

この機会にそういった生徒・学生さんたちにシビックプライド、登呂遺跡博物館を誇りに持てるようなプログラムを組んだらどうかというのが、この田んぼサポーター派遣のための学校連携プログラムになります。

このプログラムのイメージについて、下の真四角のところをご覧ください。学校連携プログラムとして、まず活動プログラムを作ります。4月に年間耕作予定等のガイダンスをして、5月に田均らしと田植え、6月には博物館のギャラリートーク、企画展を学芸員が案内しながら直接「こんな企画展だよ」というトークをします。7月は草取り、8月は今度は美術館でギャラリートークをしていただく。9月は草取り、10月は稲刈りと収穫祭、11月はSDGsの勉強会、12月はしめ縄づくりというような年間プログラムを組みまして、単に労働力の提供だけではなく、博物館や美術館について一緒に学んでもらうといったプログラムをまず考えて、②になります。学校に協定の案を見ていただきまして、協定を結ぶような部活や顧問の先生を把握することを考えております。

これはなぜ協定なのかということですが、学生さんたちに来てもらうとありがちなのが、最初は来てくれるのだけれど、年度後半になると忙しいということ。でだんだん来てくれなくなるとか、例えば熱心な先生がいらっしやって、その年は一生懸命やるのだけれど、先生が異動されて担当が代わったりされると、翌年からその学校との繋がりがパッタリ切れてしまうということ。を心配しております。そのために、学校単位でこういったプログラムの協定を結んでいただけないかなと考えております。

③連携後の増加計画案ですけれども、南側水田が今年から来年、再来年にかけて面積が増えてきます。そうすると協定で来ていただく学生さんも増えるわけですので、令和4、5年にかけてだんだん増やしていくプランを立てる。

④としては、課題となっております指導者の確保です。これは、それだけたくさんのお学生・生徒さんに水田作業をしていただくためには、田んぼの作業を教える指導者層を作っていかなければいけないということで、指導者層の確保に取り組むということです。

このような学校連携プログラムを案として考えておりますけれども、こうしたプログラムを効果的に進めるために、例えばどんな内容を加えたら、参加した学生・生徒さんにシビックプライドを持ってもらえるのか。また、学校に対してどのような働きかけ・呼びかけをしたら有効なのか、そういったことについての意見をお願いいたします。

なお、補足ですが、今回の議題は小・中学生のシビックプライド醸成の取り組みとは別個に考えております。小・中学生への取り組みはもうやめてしまったということではなくて、今回の議題の中では田んぼサポーターの高校・大学生に向けての取り組みについてのご意見をいただきたいと思っております。

説明は以上です。

山岡会長

ありがとうございました。「登呂遺跡を誇りに思う市民を育む登呂博物館運営の在り方」について、現在登呂博物館で検討されている、「田んぼサポーターを集めるための学校連携プログラム」についてご説明いただきました。それを円滑に進めるためのアイデアや意見をいただきたいということですね。

館長

はい、そうです。

山岡会長

では、ご意見をよろしく願います。ご意見のある方は挙手をお願いいたします。

上原委員

上原です。よろしく願います。高校を対象にしているということで、思い付いたのが、今回、学習指導要領の改訂により学校に取り入れられた探究学習というものです。究は研究の究です。自分たちで社会課題を見つけて、それをどうやって解決していくのか、そのフィールドは地域だということで、どんどん地域で活動しようということが色々な高校で見られています。

担当の先生方にお聞きしたところ、「なかなかそのフィールドがない」、「受け入れてくれる地域がない」と。そして、自分たちは例えば国語の先生だったり社会の先生だったりするので、そういったやり方も分からない。余計なものが上から降ってきたみたいなの、ちょっと面倒くさいという印象を持っている先生が多いようなのです。ですから、そういった探究授業と連携して、その受け入れ先として登呂遺跡があったらどうかと。

提言のシートを送らせていただいたのですが、例えばSDGsの切り口も入りまじ、自然環境や、ジャンボタニシ問題といった環境問題、地域づくり、観光の視点や地域おこしといった色々な視点から捉えられる、とても良い材料だと思うのです。そういったことで、博物館の方から「探究資料で困っているでしょう」ということで、投げ掛けてみてはどうかと。そうしたら先生方も、「待ってました」と。先生方も「0から考えるのは大変だ」と言うのです。ですから、「そういったものがありますよ」と投げ掛けてみると、先生方もきっと助かるのではないかと思います。

山岡会長

ありがとうございます。それは、高校の授業で探究授業というものがあるので、すね。

上原委員

はい。高校で探求学習というものが。ちょっと年度があれですが、必ずやらなければいけないような。先行的に何校かでモデル事業として取り組んでいると思います。

山岡会長

ありがとうございます。他にご意見のある方はいらっしゃいますか。

渋江委員

渋江です。よろしくお願いいたします。こちらの連携プログラムは、学校と協定を結んで実施されるということで、学校側が受け入れた時に、例えば今ご提案があったように探究の一環でやるとか、大学も何かの科目やゼミ活動といった授業の一環でやるようなイメージを持ちました。そうなった時に、いっぱい教えていただけるプログラムという意味では非常に魅力的なのですが、こういう形で年間を通して学んだあとに、それこそ学んだ子どもたちが「自分はこんなことを考えた」、「こんなことをしてみたい」とか、最終的にどんな学びを得たのかという辺りを総括する時間があるとより良いかなと思いました。設けておられるということだったら申し訳ありません。パッと見た時にその辺りが分かりづらかったのです。以上です。

山岡会長

ありがとうございました。その辺りはいかがでしょうか。

館長

貴重なご意見をありがとうございます。今回、参加のモチベーションになるように、「こういったボランティア活動をしたよ」ということを、それぞれの生徒さんたちが自己アピールに使えるような、出しやすいような形を考えれば、より参加者が増えるかなと実は思っていました。確かに、そういった総括する時間を設けると成果という形で見えるので、大変参考になるご意見をありがとうございます。

今回、学校連携プログラムということで考えたなかで、実際はどんな形で学校が参加してくれるのかについて、一つは駿河総合高校の生徒さんや、城南静岡高

校の地域貢献部の方が、部の顧問の先生が「やるよ」と言ってくださって、部活単位で参加してくださるといことが今年あったのです。ただ、その部活単位というものがいいのか、または学校の授業の中に組み入れた方がいいのかは、これから学校にお話に行って、「うちの学校では授業の中のプログラムでやるよ」、「うちの学校では部活単位でやるよ」というところが出てくるかなというところで、正直言ってまだ細かいところが決まっておられません。またそういったところについて、アドバイスがあればよろしくお願いたします。

渋江委員

今のように、学校側が選べることは大事だと思います。そうすると受け入れる館側は、「あの学校は部活だ」、「あの学校は総合だ」と混乱してしまうかもしれないのですが、それが逆に登呂博物館もいいし、高校や大学にとっても、もっと良いプログラムになっていくことになると思います。選択できるのは非常に大事かなと思います。

館長

ありがとうございます。

山岡会長

今のお話に関連して質問させていただきたいのですが、学びの総括ということとは少しずれるかもしれませんが、この連携プログラムイメージの中で、稲刈り・収穫祭と書いてあって、収穫祭は学びの総括ではないですが、イベントとしては面白いのかなと思うのですが、その辺りは何かアイデアはございますか。

館長

ありがとうございます。最初に思ったのは、草取りも夏の暑い中何回もやらなければいけないので、確かに単に労働力の提供になってしまうと面白くないんじゃないかなと思いました。収穫祭を入れたのは、一年を通して自分たちで育てたお米の収穫をして、勉強と水田の作業だけではなくて、お祭りのようなものを入れることで、モチベーションが上がることに繋がるのかなということで取り入れています。

山岡会長

今思ったのは、色々なところと連携した時に、個別に作業をやっていただくこともあると思うのですが、色々な人たちがここに集まるのですよね。

それで、何か交流したり知り合ったりするような機会になったら、面白いかなと思いました。

館長

ありがとうございました。確かにその時に、学校や高校・大学を越えて集まれる機会になると思います。

木村委員

木村です。よろしくお願いいたします。

学校単位の参加が基準になってしまうかもしれませんが、別のイベントや企画では各学校から希望者を募ってチームを作り、そこで一つのものを作り上げていく形で参加している企画のようなものもあるかと思います。そういう形での取り組みをもしできるようでしたら、学校を越えての学生同士の交流で横の繋がりが広がります。

高松中学校では、中学1年生が年間を通して田植えの体験をしているのですが、ある年に田んぼアートに取り組んだ年がありました。収穫の楽しみだけではなく、育つ過程で出来ていくビジュアルも楽しめるので、もし田植えをするなら、田んぼアートをちょっとやってみるといった取り組みもどうかと思いました。

館長

ありがとうございます。

石亀委員

中田本町の石亀と申します。ただいまの「登呂遺跡を誇りに思う市民を育む登呂博物館」という議題について、学生中心の話が出てきましたが、その前に、どうしたら市民に登呂遺跡を誇りに思う心を持ってもらえるかということが一番大事だと思います。理念の中で、行政として登呂遺跡に対する大きな計画を作っていくということを謳っておりました。この大きな計画についてお分かりになっていたら教えていただきたい。

それから、登呂遺跡は当初は全国的に注目を集めたのですが、その後に吉野ケ里遺跡など各地に変わった遺跡が出てきて、登呂遺跡が希薄になってきてしまっています。登呂遺跡の他と違う価値観を、市民に知らしめることが大切です。弥生文化の中での登呂遺跡の位置付け、他と違うところはどのようなものがあるのか、どのような発表ができるのかを上手く示す必要があるのではないかと。こんな素晴らしいものがあるのだよということを、市民にまず知ってもらわないと集

客に結び付いていかない。一番大事なことは、館としていかにここに来てくれる人を多くするかということに尽きると思います。そのために色々と素晴らしい企画も目にしていますが、実際にそれが誇りというところまで繋がっていくかという、皆無に近いと非常に危機感を持っています。ですから、登呂遺跡の位置付けや貴重な文化財の良さを、もっと分かりやすく発表して、登呂遺跡の良さを市民によく理解してもらうことから始めないと難しいのではないかと思います。

山岡会長

ありがとうございます。学校連携プログラムとは少し違う話ですが、取り組みの根本的なところということで、その辺りの取り組みもきっとされていると思うので、ご説明いただけるとありがたいです。

館長

まず、シビックプライドと今回の田んぼサポーターの繋がりですが、シビックプライド、遺跡や博物館に対して誇りを持ってもらうスタートが、まず知ってもらう、足を運んでももらうことだと考えています。まず足を運んでももらう時に、ここに勉強しに来ようと言っても、高校生や遺跡に関心がない人たちはなかなか入ってこれない。その中で、ハードルとしては田んぼを手伝ってくれないかということで泥んこ遊びをしたり、田んぼを手伝ってもらうというところを導入として、まずここに来てもらう。そして稲作を体験しながら、その合間に「実はこの遺跡ってこういうところなんだよ」、「博物館にはこういうものがあるんだよ」というところを見てもらう。そういったところから、だんだん始めは遺跡に足を運んで、それからそれを知って、どういったところが他の遺跡と違うのかを自然と学んでもらう。堅苦しくないような、そういうプロセスを踏んでやれるのではないかということで、これが実は田んぼサポーターがシビックプライドに結び付くのではないかなというふうに考えているところです。答えになったでしょうか。

石亀委員

館長のおっしゃることは分かるのですけれども、周りの農家の方々のお話を聞くと、「一番嫌いなことは農業だ」、「税金を納めるのに大変だ」という現実の問題を抱えています。ですから、確かに学生に意識を持たせることも大切なことだと思いますけれども、それが実るまでに非常に年数が掛かってしまう。そんな時間はたぶんないと思います。もっと身近に集客について考える必要があると感じます。今は機械化が進んでいますけれども、農家の方はいわゆる3Kに値す

るような大変な作業で、「田んぼをやるのはもう嫌だ」と言ってどんどん売ってしまう。私の周りも田んぼがほとんどなくなってしまいました。今の人たち、若い層から高齢者も含めて、農家は一番やりたくない職業の一つになってしまった。今おっしゃったように、学生にこのことを体験させても、理解させて実るまでに何十年も掛かってしまう。ですから、一つの企画としては良いかもしれませんが、もっと現実的なことを考えると、誇りに思うよう何か別の形から探っていくべきだと思います。

山岡会長

ありがとうございます。館長から説明いただいたことに対して、「導入としてまず来ていただいたらいいのではないか」ということをお話しいただいて、全体のプロジェクトの中の一つを今は説明いただいた。ただ、そもそも登呂遺跡のどこがすごいのか、もっと知らしめてほしいということなのですよ。恐らく今日も企画展もそうですが、そういう取り組みも博物館ではされているように思いますが、いかがでしょうか。そこをもう少し説明していただきたいということでしょうか。そういうわけではないですか。

石亀委員

すみません、たびたび。今、先生がおっしゃったことは非常によく分かりました。まず、博物館の職員の皆様、この協議会の皆様のお考えと、我々市民の重要文化財に対する考え方の間に、大変なギャップがあるということを考えなければなりません。絵画等は、観光客が行けばそこで感動してリピーターに繋がっていく。こういう考古学については、今まで私達も専門の教育を受けたことはないし、子どもたちも考古学や古代の歴史に対する関心は薄いのではないか。専門家の皆さんにとっては非常に貴重だということは伝わってくるのですが、一般市民からは登呂遺跡が非常に遠いというのが現実だと思います。

弓削委員

「まちなびや」の弓削です。今のお話を伺っていて、やはりすごくギャップがあるのではなかろうかというところが課題だと。そもそも「田んぼサポーター」でいいのだろうか少し思いました。田んぼを手伝ってもらおうというスタートはスモールステップとしてすごく分かりやすいのですけれども、なんとなく「手伝う」というイメージで主体性が少し落ちて、作業要員という感じがニュアンスで付いて回ってしまう。そうだとしたら、もうちょっと登呂について皆で発見していくとか、わくわくするような博物館にしていこうとか、そもそも「田んぼサポーター」ではない名前を、まず若い人たちに考えてもらうとか。どんなプログ

ラムを作ったら皆参加したいかという、プログラム作り。例えばこういうことを博物館としてはできる用意があるのだけれども、高校生だったらどんなものを作りたいかとか、市民を巻き込むのだったらどんなプログラムだったら良いだろうとか。何かプロセスに関わってもらうことが、恐らく本質的な気づきに繋がって、予定された体験活動より一歩探究ということで、自分で課題を見つけて、自分で課題に対して考えたと思えることがいいのかなと思いました。

だから、プログラムを考えるチームだったり、常葉大学さんには造形学部もあるので、美しくアピールする仕組みを考えたり、絵でもいいし動画でもいいし、色々なことができると思うのです。もっと我々では思いつかないアイデアが入ってきて、それ面白いねということになると、よそにもアピールされて気づかれていくのではないか。お仕事を農家として厳しいという現実はすごくあると思うけれど、違う価値を作る。稲作はすごく楽しい、喜びなのだと、農家ではない第三者・よそ者、県外・市外の人、農家ではない若者がそんなふう to 思えて関わられる、ここが発信拠点になればいいと思いました。

今は、土に触れることやゆったり過ごすことが見逃されている時代なので、すごくいい追い風になるんじゃないか、アピールしがいがあるんじゃないかなと思います。だから学習の一環であれ、部活動であれ、サークルであれ、できることはある。そして静岡は教育学部がありますから、そういうところで社会科の学生さんに関わっていただける余地が探せないか、授業で扱うならどうかとか。農高さんは関わりがありますか。

館長

これは書いているだけで、これから聞いていきます。

弓削委員

そうですね。天下の農業高校さんがあるので、稲にも関心を持ってくだされば。パンは近所ですごく有名なものを知っていますが、米粉のパンでもいいのですけれども、何かうまいつながりができてきて、静岡、登呂博物館だからこそ出来ていくのだということが見えるといいなと思いました。だから、エール登呂博とか、皆で盛り上げていく方向性でスタートできると、面白いことが生まれるんじゃないかなと思います。

山岡会長

ありがとうございます。

堀切委員

常葉大学の堀切です。私からは三つほどお話させていただきたいと思います。

一つはスケジュールですが、令和3年2月から学校へアプローチして、4月スタートは無理です。分かった上で書いていらっしゃるのだと思うのですが、高校にしろ大学にしろ、授業の中で落とし込むとすれば、少なくとも夏過ぎ、9月・10月ぐらいまでにお話しいただかないと、やっぱり次年度には組み込めないのですね。先生方もご承知のとおりですけれども、2月では無理です。

もう一つは、学校と協定を結ぶ形でやりたいということです。先ほどのお話にもあったように、部活単位でやるとか、大学だとゼミ単位であるとか、個別の先生の一本釣りの方がやりやすいはずですが。そういうアプローチももちろんされるべきだとは思いますが、先ほどのご説明だと、そういう一本釣りではなくて学校単位との授業でやりたいということです。それはなかなか難しいのではないかという気がします。もし学校単位との協定を本気でやるのであれば、登呂博物館という行政の末端が動いてはダメです。例えば、常葉大学は静岡市と方策協定を結んでおりますので、部局の方から大学側にアプローチしていただかないと、協定はたぶん結べないと思います。もちろん、現場は現場レベルで館長や学芸員が、一本釣りで学校の先生と会合を深めていっていただきたいのですけれども、もし学校単位でということであれば、部局の方で動いていただかないと無理だと思いますので、大変ですが、部局の方へ働き掛けを同時に行う必要があると思います。もし本気で協定書ということをやるのであれば、そういう御苦労もあるのではないかと思います。

三つめは、先ほどから出ているシビックプライドですけれども、これは非常に大きな概念で、現場で扱える問題ではないと私は思っています。先ほどお話があったように、こういう田んぼをお手伝いすることが、参加者にとってシビックプライドを醸成するための入り口となるというのは、確かにそのとおりなのですが、それが誇りという次のより高次のレベルに持っていくためには、さらに段階が必要なのです。その段階を踏む前に、単に田んぼに行っただけでは不足しているという気がします。

私が思うに、シビックプライドというのは、本当は現地の人間が現場をよく知るために必要なのですけれども、それだけではなくて、むしろその現場にこない人、あるいは外部の人がそこをどう見てるかという外部俯瞰が非常に大事だと思います。例えば、富士山は静岡県民の誇りなのですからけれども、実は富士山に県民のほとんどは登らない。あるいは、県のSPACという舞台芸術センターがありますが、そこに演劇を見に行く県民はあまりいない。ただし、実はSPACは世界的に評価されている劇団であって、しかも専用の劇場を持っていることは全国的に珍しい。それほど世界に名を成している劇団が静岡にあるということは、自分は演劇を見に行かないですけれども、それだけ世界で評価されている劇団がある

のは、いいだろう。税金の使い道を考える方もいらっしゃるのですよね。エコパも、自分はスポーツを見に行くわけではないけれども、国際規模の競技場があるというのが誇り。そういうわけで、実はシビックプライドは行かない人、あるいは外部がどう評価しているかが非常に重要なのであって、現地の現場の実体験を醸成すると同時に、外部の評価をどう作っていくかということが大事ではないかと思います。

登呂もすごく外から評価されている。全国的、世界的に認められていることを市民に知られると、「そんなにすごいのか」ということになるのですよね。ですから、外部評価をどう作っていくかというのが、やはり現場の登呂博物館の、行政の末端の仕事ではない。これは市の組織、観光課かどこの課か分からないですけども、市政全体でやらないとシビックプライドにはなかなか結び付いていかない気がします。ですから、これは局の方でまとめていただくことも同時に必要かなと思います。ただ、そうは言っても具体性がないので、どういうふうにするかということ現場で考えて、例えばプログラムの中で登呂遺跡というのは実は外部にどれだけ評価されているのか、美術的にどれだけ評価されていたのかという外部の視点をサポーターさんたち、学生さんたちに教えるような内容があったら良いと思います。「考古学的・学問的にはこうだ。歴史的にはこうだ。」どうやって登呂は日本全国、世界に対して認められているのかということ若い子に教えてあげる。そうすると、目の前に広がっている何でもないような田んぼが、実はそんなにすごいものなのだとすることを、改めて外部の評価を知ることによって認識することが可能だと思います。ですから、そういう内容もプログラムに取り入れていただければよいかなと思います。思い浮かぶのは、クラウドファンディングなんかもいいのではないかと思います。クラウドファンディングは、別にお金がどのくらい集まったかということではなくて、外部の人がそれだけ登呂を評価してくれたという指標になるのです。ですから、プログラムの中に外部的な視点、外部評価を知らせるような内容をちょっと盛り込むといいかなと思いました。

山岡会長

活発なご意見をいただきありがとうございました。それでは、ここで5分間休憩を挟みたいと思います。11時10分に再開しますので、よろしく願いいたします。

(休憩)

(3) 議題②「登呂遺跡復元水田における観光者向け体験プログラム実施案について」

山岡会長

それでは二つ目の議題に入ります。「登呂遺跡復元水田における観光者向け体験プログラム実施案について」、事務局から説明をお願いいたします。

梶山主査

では始めさせていただきます。私は登呂博物館の梶山と申します。議題②について説明させていただきます。

こちらの議題については、「登呂遺跡復元水田における観光者向け体験プログラム実施案について」ということで、登呂博物館では現在、静岡市行財政改革推進審議会の答申を受けまして、「稼げる施設（文化力を経済力へ）」を展開していくため、このたび文化庁の補助金であります「Living History “生きた歴史を体感する”プログラム促進事業」の交付を受けまして、登呂遺跡の復元水田を活用した体験メニューを開発しております。このたび、皆様におかれましては今回の計画の、私ども事務局の方から趣旨説明と現地視察を行いまして、その後体験プログラムについてご提言をいただきまして、このプログラムをより深いものにしていきたいと思っておりますので、よろしくをお願いいたします。

説明に先立ちまして、本日、するが企画観光局企画事業本部主任でございます伴野様に、アドバイザーとしてご出席いただきました。するが企画観光局様は、静岡県中部地域を圏域としまして、観光関連産業の振興などによる地域経済の活性化と促進を目的に運営されております。本日は、するが企画観光局様にこちらの体験プログラムを観光コンテンツとしての検証や、これまで市内で行われている取り組み等をご紹介賜りまして、皆様のご意見をお伺いしたいと思います。

では、資料別紙4と体験プログラムの実施計画書案、するが企画観光局様の事例紹介、この三つの資料を使って説明したいと思います。時間もございませんので、説明は趣旨のみという形で進めさせていただきます。

こちらの事業名につきましては、「東アジア稲作文化登呂ムラの発信事業」ということで、当該事業の目的は、弥生時代の米づくりをテーマにした体験プログラムを開発し、県外・国外からの観光目的の来訪者にも対応できる観光コンテンツとして誘客を進めてまいります。これにより、登呂遺跡の弥生時代の稲作農耕集落のイメージと歴史的価値を全国に強く発信することを目的としております。

「Living History」の補助事業につきましては資料1ページにございますが、こちらはただ稼げる施設ということではなくて、その文化財を核として賑わいを創出し、増えた収益を文化財の整備や修理に再投資して、さらなる賑わいに繋げる好循環の創出を目的とした補助金でございます。

この体験プログラムの骨子というか基本的な考え方として、今考えておりますのは日帰り圏内の家族層をメインターゲットとして、分かりやすくかつ楽しく遊びながら登呂遺跡の魅力に触れられるメニューとしております。以下、三つの項目を構成の中に含めていきたいと考えております。一つ目が、「復元された弥生時代の稲作集落登呂ムラでの非日常的な体験」、二つ目が「稲作体験から博物館の展示等への展開」というものを考えております。三つ目が「地域住民（田んぼサポーター）との交流」を挙げています。

少し外れてしまいますが、先ほどから挙がっております田んぼサポーターにつきましては、まずは田んぼサポーターの皆さんに米づくりというのを知ってもらいまして、そこから来た方の補助、参加者へのお手伝いや田植え、稲刈りの手伝いをしていただくなかで、先ほど堀切先生からもございましたけれども、参加者からのご感想・評価を聞くことで、田んぼサポーターの皆さんのシビックプライド醸成にも繋げていきたいなという目的で、地域住民との交流というのもこの体験メニューの中に入れていきたいと考えております。

具体的な体験プログラムにつきましては、プログラム書の2ページに詳細がございます。一つ目が田植え体験ということで、これまでも細々ではございますがやってきた対応になるのですが、登呂遺跡内の復元水田において赤米の田植え体験を提供してまいります。その際、登呂遺跡から出土した田下駄や木製品の農具のレプリカ等も一緒に設置しまして、そこで実際に利用してもらいたいと考えております。実施は6月くらい、田植えの時期一ヶ月間、週末等に展開する予定でおります。

続きまして、赤米の収穫体験ということで、こちらも復元水田において実った稲穂を刈る体験になります。稲穂を刈る際には穂摘み用の石器によって、穂首刈りという当時していたであろう収穫方法を体験していただきます。また、これに伴いまして、脱穀・粃すりなどの作業を通して、稲が食べられるお米になるまでの工程も紹介したいと考えております。こちらの実施はちょうど今の時期になりますが、10月から11月の一か月くらいの各週末で予定しております。

三つ目に、石器（穂摘み具）作り体験ということで、稲の収穫時に使用していたと考えられる石器、穂摘み具を作る体験をします。体験者には穂摘み具用の石器の製作を体験してもらうとともに、自分で作った石器で実際に前の田んぼで収穫作業をやっていただく形になります。こちらも収穫体験に合わせて10月から11月の実施を予定しております。今はこのような三つの体験メニューなのですけれども、今後こちらを組み合わせたり、他の体験メニューと組み合わせたりして、より大きなプログラムにしていく予定でございます。

今回はこのような骨子という形でのご紹介になりますが、今後それぞれの体験プログラムをより学術的な検証ですとか、体験メニューとして観光者向けのメニューになっているかどうかとか、その辺りのインター事業も実施しながら、体験プログラムとして確立していきたいと考えております。

体験プログラムの趣旨につきましては以上でございます。これから実際にこういった体験プログラムを提供する場所を遺跡内でご紹介したいと思っておりますので、皆さま恐れ入りますが準備をお願いいたします。

（現地視察）

梶山主査

駆け足になってしまい申し訳ございませんでした。以上が遺跡の中での取り組みになります。それでは、ここからは、するが企画観光局の伴野様から、今の静岡市の取組状況についてご説明いただきたいと思っております。お願いいたします。

伴野氏

するが企画観光局の伴野と申します。本日はよろしくお願いいたします。それでは、私たちの取組事例をご説明いたします。

するが企画観光局は DMO という組織で、「Destination Management Organization」ということで、地域の稼ぐ力を引き出し観光地経営していく組織になっています。我々のエリアとしましては、静岡県中部地域5市2町を担当しております。3年前からこの組織を立ち上げまして、さらなる取り組みをしているのですけれども、その中で一つの取組事例をご紹介いたします。

こちらは「MANAVIVA!」という、子どもたちが遊んで学べる体験プログラムを

活用したプラットホームを開発しました。こちらは今年の8月にサービスリリースしています。パラグライダーや海釣り体験、様々なプログラムを格納しております。予約やクレカ決済の機能が付いたサイトになっています。このサービスの特徴やどういう考え方に沿って開発してきたのか、そういったことを説明させていただきます。

まず、静岡県中部地区の地域資源を活用して、合計30の様々なプログラムを掲載しています。このサービスの全体像としましては、我々でサイトを開発し、運営、プロモーションしております。また、事業者がPBTを開発してこのサイトに格納しています。宿泊が伴うようなツアー・商品造成もしています。ターゲットはかなり具体的に定義しています。世帯年収900万クラスの子どもへの教育熱の高い層、プレジデントファミリー層と言っているのですけれども、プレジデントファミリーという雑誌がありまして、そういった雑誌を読まれている層というイメージでターゲットを置いています。

このサービスの特徴は大きく三つあります。「学びの訴求」、「サイトは動画訴求していく」、「事前にツールを使って学びの効果を最大化していく」という三つがございます。特徴の二つ目として「学びの訴求」というところですが、この様々な体験から得られる学びのエッセンスを七つ用意しまして、各プログラムに設定しています。また、単なる体験ではなく、どういった学びが得られるかを、しっかりサイトに記載して訴求していきます。具体的には、海釣り体験などは釣った魚をその場で捌いて食べるという体験があるのですが、そこで終わりではなくて、命のありがたみや、日常の食事に対する感謝とか、そういった気持ちが育まれる。単なる体験で終わらずに、子どもたちにとってどういった学びがあるのか、顧客にとって価値は何かを具体的に訴求していきます。また、こういった動画をすべてのプログラムに用意しています。体験はなかなか伝わりにくい商品ですので、すべてこのように子どもたちが体験している様子を動画に収めて、分かりやすく訴求する工夫をサイト上でしています。

特徴の三つ目として、全てのプログラムに事前のツールを用意しています。こちらは体験の3日前に、このツールをPDFで自動送信しているのですけれども、これはクイズのようなもので、体験前に子どもたちの中に問いかけて、そして現地に行って体験することで、より学びを深くしてもらおうというものです。例えば、陶芸体験の前に、「器って何で出来ているのだろう」といったことを子どもたち

に考えてきてもらう。そういうツールを用意して送っています。他にも色々細かい工夫があるのですが、大きく三つの特徴があるサービスを開発・展開しています。今のこれはマーケティングでよく使われる4P分析というものなのですが、プロダクト（製品）、プライス（単価）、プレイス（流通）、プロモーション（広告）の四つを「MANAVIVA！」においてはどういうふうを考えてきたかをご説明いたします。

まずプロダクトについては、体験事業者様が今までやってきたようなプログラムを格納してもらっており、中身をこちらで一から全部開発してというのはなかなか難しいところではあるので、基本的に中身は事業者様が今までのプログラムを実施する。ただ、こちらでは先ほどご紹介した事前ツールを使ったり、体験事業者様を集めて、子供たちとこのように接すると良いとか、そういったファシリテーション強化のためのセミナーを行うことでプロダクトの価値を高めています。

プライスに関しては、できるだけ地域事業者に稼いでいただいて、今後継続的に実施していただくために高価格のものにしていくということで、平均単価は一人当たり5,000円のプログラムとなっています。

また、プレイスに関しては、先ほどご説明したように、学びの訴求と動画を使った訴求をしています。

プロモーションに関しては、動画を使ったインターネット広告ですとか、そういった教育熱の高そうな学校へチラシを配布させていただいたりして、プロモーションしています。

一つずつ詳しく説明したいのですが時間がないということで、プライスの事例として一つご紹介したいと思います。

こちらは左側が「MANAVIVA！」で販売している座禅体験です。「MANAVIVA！」では3,000円で販売しています。右側は昨年度同じお寺で行った座禅体験で、中身が同じですが500円で販売している。実際はどうだったかということ、500円の方が全然売れなくて、10月に「MANAVIVA！」で初回を実施したほうが売れました。お寺もまさか3,000円で売れるとは思っていなかったみたいで、すごくびっくりされていたのですが、このように必ずしも安いから売れるというわけではなくて、ターゲットに対してしっかり体験価値を分かりやすく訴求することが大事だと考えています。逆に低価格にし過ぎると、自ら「価値はない

ですよ」と言っているようなものなので、こういったプライスについても考える必要があると思います。

体験については、価格の比較が難しい商品だと思っていまして、例えば、300円だと皆さん高いと一瞬で判断できると思うのですがけれども、なかなか体験は判断が難しい商品ではあるので、そこはちょっと比較が必要かなと思います。

我々は地域事業者と接するなかで、四つの定義の中でもプロダクト、体験だけに目が行きがちかなという印象を受けていて、先ほど説明したように、それ以外のPについても考える必要があると感じております。

以上、簡単ではありますが事例の紹介となります。

梶山主査

ありがとうございました。ここからは、皆様からご提案やご意見をいただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。

山岡会長

関東圏からの集客を見込むためのものと考えてよろしいでしょうか。そういうことも踏まえた上でご意見をいただければありがたいです。よろしく願いいたします。

では、私から。今、外を見せていただいて、課長とお話させていただきながら思ったのですがけれども、水路などもかなり作っていらっしゃいますよね。それで実際に登呂遺跡から出ていて考古学的にも分かっていることで、どのように米づくりがされるのかを教えるというか、それをどうやって維持しないといけないのかとか、そういうことまで含めたら面白いかなと思いました。考古学的な話をすると、狩猟採集段階では狩りをしたり木の実を取って食べるというのは、そんなに自然環境の改変をしないでもいいのですがけれども、それがものすごい手間がかかるということを体験できるし見られると思うので、米づくりだけではなく、米づくりを前提として水路がどうやって作られているかとかがあったらいいかなと思いました。プログラムの中に、そういうことも考えられていらっしゃるのですかね。

梶山主査

やはりどうしても田んぼ、米づくりというところにスポットが当たってしまいがちなのですけれども、登呂遺跡から出てきたところでは水路や、矢板で補強といったところが登呂遺跡らしさにつながっていくと思いますので、このプログラムの中で、連動したプログラムとして開発していきたいと考えております。ありがとうございます。

山岡会長

ありがとうございます。

堀切委員

この体験プログラムは、先ほどするが企画観光局さんがお話されたような形でやるということですか。つまり座禅体験や宿泊体験のように、例えば5,000円くらいのプランで商品化するという形でよろしいでしょうか。

梶山主査

ただいまのところは、数百円での体験という形になっているのですけれども、やはりこうした事業を好循環させて、うちが利益を多少得ていくようなものがないと、文化財の今後の活用や保存が片手落ちになってしまうと思います。私もそういった観光のノウハウ、プロモートといったことができないものですから、是非ご協力いただきまして、そうしたものを目指すべきゴールとして考えていきたいと思います。

堀切委員

そこは考えるポイントの分かれ目だという気がするのですよね。つまり、5,000円の商品化にして富裕層だけが来れる。それで確実に稼ぐというのは一つの戦略として有りだと思いますけれども、社会教育施設として広く開かれていなければいけないという理念もあるのです。ですから、どちらが良い悪いではなくて両方ある必要がある気がします。5,000円のプランにするのもいいですけれども、無料でやるとか、200円や300円でやるという両面が必要なのかなど。これはこれでいいのですけれども、社会教育施設として開かれるということでは

うと、そういう廉価なものも見捨てないでいただきたいなと思っております。

そういう観点から、プログラムの内容については、非常に面白い内容だと思います。できれば、先ほど「稲刈りの石器づくりが20分から30分」と出てきましたけれども、例えば5分や10分などのプログラムも一緒に考えていただければ、本当に時間がない観光客がその場で5分でやってすぐに帰るというようなものと、一時間くらいのもので2パターンご用意されるといいのかなと思います。

山岡会長

ありがとうございます。他にご意見ありますでしょうか。

弓削委員

素晴らしい景色を見学させていただいて、これはすなわち価値だなと感じました。するが企画観光局様の「MANAVIVA！」に載せていただいて、早速やっただけですぐにお客さんが来そうだなと思いました。

プログラムの中に田植えがあって収穫があるので、収穫したら食べるというところまでできるとすごくいいと思います。食べる際に、ぜひこの地域の良さで、タイミングよくシラスやサクラエビが入るか分かりませんが、この際、色々海や山のもの、地の恵みのようなものが入ってくると、次にここからまた別のところへ流れていくことにもなって、本当に市全体が学び場であり、遊び場になると思います。私はまだ全部は見えていないのですが、30プログラムが多彩なのだろうと思うので、是非、するが企画観光局さんで上手く取り入れて、色々な方が知るチャンスになったらいいと思いました。

山岡会長

ありがとうございました。

木村委員

スマホで「MANAVIVA！」を確認させていただいたのですが、スポーツからアート、座って楽しむものまで本当に色々なプログラムがあって、登呂の魅力をこの中でアピールすることは素晴らしいと思います。けれど逆に、見栄えが良いプランもかなりありましたので、その中でこの魅力をアピールしていくこと、まずそ

ここに載せるのが大変で、いかに目に留まるようにやっていくかが大変だと思いました。静岡以外の所へのアピールに関しては良い企画なので、この値段だからこそ来る層という考え方も分かるような気がします。またちょっと違った角度からの旅行者・ファミリー層が来てくれると嬉しいです。

山岡会長

ありがとうございました。

石亀委員

先日いただきました資料の「役割」の中で、市の文化財行政が大きく動き始めていると書かれておりました。この内容についてお聞きしたいのですが。

館長

ご説明いたします。この文化財行政の状況が大きく動いているところが、静岡市だけではないのですけれども、「保存から活用へ」という言葉がございまして、もともと文化財は保存に重点を置いていたのが今は活用へ、観光等で経済活動に寄与するものとして、新たな価値が見直されているところでございまして、そういったことを言っています。保存だけではなくて、文化財を活用していかに人の流れを作り出すのか。それがその地域の発展にも繋がるという視点でございします。

石亀委員

予算が付くとか、そういうことではなくて？

館長

そうではないです。

石亀委員

12月31日の大みそかに、名古屋から孫が来たので日本平の夢テラスに連れて行きました。もう車が置けないほど大変な人出でした。外国の方もいらして、日本平ホテルの辺りまで本当にたくさんの人で埋まっていました。360度展望が開

けているので、非常にロケーションが良かったです。ふと西を見ると、すぐ足元に登呂遺跡がある。こんなにも皆に知られて盛況な観光スポットがあったのだとビックリしました。そこまで行かないにしても、登呂遺跡を知らしめること、先ほど話題にできればとありましたが、どうしたらこれに近いものができるだろうと思いました。

9月にとびっきり静岡というテレビ番組で、近隣のグルメ店を中心に紹介して、最後に行きついたところが登呂博物館でした。翌日に益田さん（令和元年度登呂博物館在籍職員）にも電話したのですが、非常に良い番組でグルメ番組は視聴率が高いですし、最後に登呂博物館に引きずってきたのは非常に良い宣伝効果になったと思います。私も楽しみにしていますし、ブームに限らず博物館のこういう発信の仕方が大切であると思います。

それから、10月4日の静岡新聞に「田園に吹奏楽の音色」という大きな記事が出ていました。これは音楽を勉強している方にも非常に良い時間になったと思います。残念ながらあとでこれを知ったので、グランシップでもコンサートは年間を通して発信していき、こんな形で吹奏楽のパフレットが出回ったらもっと効果があるのではないかと思います。ジャズと古代のコラボは非常に面白いですし、良い企画でした。文化財だけではなくて、色々な材料を引っ張ってきて文化財につなげていく。

もう一点、「水とともに生きる - 静岡平野のパイオニア - 」という企画があり、非常に楽しみにしながら見に行ったのですが、「水とともに生きる」の「水」が全く感じられなくて、もちろん貴重な土器だと思うのですが、この意味が分からなかったです。先ほどの話でも出ましたが、水こそ農耕の原点なのです。水なくしては稲作もできませんし、私は登呂を取り巻く水の動きがどうあったのかを探しに来たのですが、それは残念ながら全くありませんでした。これから是非、稲作の事業を進めていく際に、水の流れ・使い方を含めて表現していただきたいです。

山岡会長

ありがとうございました。企画展を先ほどご覧になったとおっしゃいましたが、色々な水の出土遺物やそういったものが結構展示してありました。ですから少しその辺りが分かりにくいのかもしれないと感じました。

他にご意見はありますでしょうか。それでは様々なご意見をいただきありがとうございます。皆様からいただいたご意見については、今後の博物館運営に活かさせていただきますようお願いいたします。これで議事を終了させていただきます。司会進行を事務局へお返しいたします。

事務局

それでは、これもちまして、令和2年度第1回登呂博物館協議会を閉会いたします。お時間が超過してしまい申し訳ございませんでした。どうもありがとうございました。協議会は年2回開催する予定でございますので、次回は令和3年2月の開催予定でございます。本日はお忙しい中ご出席いただきまして誠にありがとうございました。

署名欄

静岡市立登呂博物館協議会

会長 山岡 拓也

委員 木村 貴子

